

トラフグの資源管理が始まります。

近年、トラフグ(日本海・東シナ海・瀬戸内海系群)の資源量は減少しており、推定では平成17年に129万尾であったものが26年には57万尾にまで減少しています。最新の予測では、27年は96万尾と一旦減少に歯止めがかかったとされていますが、依然として予断を許さない状況です。

このような状況を受けて、県では小型定置網(写真1)で漁獲されるトラフグのモニタリング調査を行っています。

毎年ゴールデンウィーク頃、トラフグは産卵のため、日本海や東シナ海から岡山県の目の前の瀬戸内海まで回遊してきます。全長3mm程で産まれたトラフグの赤ちゃんは速い潮流に流されながら、1cm程になると河川の河口部等にたどり着きます。その後、幼魚は河口を離れ沿岸域で更に成長し、主に日本海や東シナ海に向けて回遊を始めますが、その途中で小型定置網に入ります。

平成27年と28年の調査から、トラフグは7月上旬に全長5cm程で漁獲され始めることが分かりました。7月下旬～8月上旬に漁獲のピークを迎え、それ以降は数を減らしながら、20cm程になる晩秋まで漁獲されます。

この結果を参考に、漁業者等で構成する資源管理協議会において、「全長10cm以下のトラフグの再放流」を提案したところ了承され、県下全域で取り組むことになりました。

また、昨年に引き続き、県中部地区の漁業者は「ふ化仔魚放流」に取り組む予定です。昨年度は水産研究所の500L水槽を用い、172万尾のふ化仔魚を下津井沖に放流しました(写真2,3)が、今年度からハッチングジャー(写真4)という装置を用いて、より漁業の現場に近い場所で飼育・放流することになっています。

今後もトラフグの調査と資源管理を続けることで、少しでもトラフグ資源の回復につながることを期待しています。(資源増殖室：竹本)



写真1 小型定置網



写真2 採卵の様子(平成28年)



写真3 トラフグのふ化仔魚(全長約3mm)



写真4 ハッチングジャー